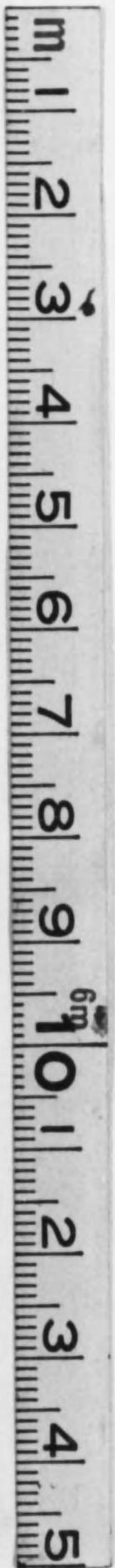


特252

3/



始



特252

3/

谷良意著

勤勞教育
第一輯

誠の生活

東京 日本勤勞教育協會 刊行

特252
31



大谷良意著

誠
の
生
活



目次

一、生活の出發……………	三
二、幸福な生活……………	一四
三、國體明徴の實體……………	二九
四、日本思想の實相……………	四三
五、天地に通ずる生活……………	四七
六、女性の本道……………	五五
七、須く第一人者たれ……………	六二

誠の生活

大谷良意 著

一、生活の出發

印度の昔話に、或人が奥山に入つて偶然獅子の兒を捕へ、家に歸つて山羊に育てさせた話がある。獅子の兒は母羊の優しい、そして情けの籠つた親切な養ひ振りに感服して、眞の母親として羊牛や、緬羊や、驢馬と一緒に家庭に育つて居た。我ながら眞の羊牛だと思ひ、羊牛の食ふものより外に食はず、羊牛の恐れるものを恐れて羊牛となつて生長した。だんだん生長して行く中に、その行動が時々獅子の本性を露はすこともあつたが、生立を知つて居るから、仲間からも怖れられることもなく月日を経

過した。さうして人間なれば成年に達した時になると、一夜、物凄きまで冴えた月の光に、時々黒雲が雲足早く行過ぐる有様は、何だか急風でも起りさうな光景であつた。獅子の兒も、何か心ありげに月の光を浴びた向ふの山の畔を眺めて居た。折しも一刷毛霧のかかつた樹林の間から高らかに大獅子の吼ゆる聲が聞えた。此の時獅子の兒は忽ち身振りして立揚り、如何にも共鳴したかのやうな調子で、一聲思ひ切つて唸つた。さうして仲間の驚きに目もくれず、一目散に山の彼方に飛び去つた。その後二、三度は元の母羊の群の處に歸つて来て、憐れげに母羊やその群を眺めて居たが、何時となしに去つてしまつた。後には一切姿を見せず、奥山深く獅子の群に入つて、自然の餘生を樂んだといふことである。

これは一場の昔話であるが、人生の航路もまたこれと同じく、その本性を知ることが極めて大切である。どれほど母性の愛を受け、どれほど群友の情けを受けても、その本性は、羊牛と同じ生活をなし、同じ運命に陥ることが許されず。遂に深山幽谷

の中で獅子と共に暮すことが幸福であつたのである。

我々人間もこれと同じやうに、その天性に適つた生活をすれば幸福であるが、その天性に背いた生活をすれば不幸に終るのである。

そこで、人間生活の出発は何んであるかといふと、それは人間としてその本性に従つた生活をするといふのが根本なのである。元より人間の本性は天性といつて自然に備つてあるものである。人間の知識や感情で之を造つたり捨てたりすることも出来ない。又反對に之を否定したり、之を斥けることも出来ない。大體、人間の本性は自己を中心とする本性、愛を中心とする本性、物質を中心とする本性、理想を中心とする本性。に分類することが出来る。言ひ換へれば、眞、善、美の本性である。その何れを無視しても幸福でない。凡ての本性に従つて生きて行くことが、生の根本であり、生活の出発である。言ひ換へれば、政治も、經濟も、法律も、教育も、宗教もこの本性に従つてよりよくより高く生きやうとするのに他ならないのである。

六
さして人間の本性は求める。満たす。よりよく生きるの法則に従つて限りなく發展する。例へば人間は生れ乍らにして（否それ以前から）ものを欲する本性（食欲）を持つてゐる、成長するに従つて性欲（愛する欲）が生れ、即ち男女結合の本性がそれである。男女の愛は更に血族愛、氏族愛、社會愛に擴がり遂に人類愛に迄發展する。併し是等の發展は自己の生活が必要の限度に於て充たされた時に發展する。即ち個人の衣食の道が満たされ、或はその可能性があるとき。始めて發展する。若し、それが反對に、自己の生活が充たされず、又その可能のないとき、それは如何に博愛な人でも、どんなに慈善な人でも、社會國家を顧みてゐる邊がない筈である。

だから、自分の生活だけは困らないといふ事が理想生活への出發點である。即ち必要の限度に於て自分の生活を満たすといふのが根本である。そして、人間の生活を満たすものは、何んであるか、それは云ふ迄もなく物質そのものである。精神論者や觀念論者のいふやうに、精神さへ良ければ、物質は獨り手に出来るものである。凡ての

物質は、心の影であるから、念さへあれば、物質は獨りで歩いて來るやうなことをいふけれども、そんな馬鹿げたことは吾々はどうしても信じられない。なせなれば、三千年も昔から、神の存在を説き神の教へを説いた神學者や宗教家は澤山ある。けれども、未だかつて、神様を見たこともなければ、神様と話した事もない。況んやどれほど貧乏し、どれほど困つたからとて、ただの一度だつて、見舞に來て下すつたり米一粒でも神様から直接與へられたといふ事を聞いた事がない。又どれほど病氣をし、どれほど苦んでも藥り一服でも飲ませられたといふ事を見た事がない。といふのが、信者達の話しである。吾々は説教所や、神學校で學んだ、宗教家の話しを信する前に、何んの爲に宗教が生れたのか？ 何の爲に學問が必要なのかを本當に確かめる必要がある。過去、現在、未來を説く説教、それは科學と同じく、色々な人間の頭から絞り出された知識の集りである。つまり、人間の考へ方の集合である。だからそれは少しも實物、（眞實）に觸れたものではなく、常に人間の考へ方によつていつでも變更

されるものである。

言ひ換へれば知識の優れてゐる人の考へ方と知識の劣つてゐる人の考へ方との相異に過ぎない。吾々は今、考へ方の相異については何等の關心も持つてゐない。なせなれば或る物が考へ方によつて甲となり乙となるやうでは、それは本當のものでないからである。

例へば此處に、一粒の麥がある。流れの清い川がある。景色のよい山がある。谷がある。木がある。草がある。鳥が啼てゐる。此の實物を見て、誰が、麥を米と考へ、川を布と考へ、山を海と考へるか。それは知識の優劣や賢愚に拘らず。川は川、山は山、鳥は鳥と見るであらう。そしてそれは少しも又誰でも疑はないであらう。かく、何人が見ても、どんな人が考へても變りのないもの之が本當なのである。

かやうに本當なもの、誰れが考へても變更の出来ないものでなければ、吾々は本當に信ずることが出来ない。

科學にせよ、宗教にせよ、かうした眞實の上に建てられたものでなければならぬ。それが時の流れに従へ、或は知識の進歩につれて本當なものから離れ、その離れたものの上に又作り、その作られたものの上に更に作るといふやうに、最も土臺となる實物がなく、ただ想像から想像を産むのに近代の知識萬能論がある。建築で云ふと、最初の基礎工事は自然（本當の土地）の上に固められたのであるが一階の建築が終ると二階三階の建築に取りかかる。その時は既に一階を建てる時の建築師ではなく別な建築師になつてゐる。だから、その建築師は、基礎工事の苦心（實際）を知つてゐない。只一階の上に如何に立派な二階を建てるべきかに苦心する。又三階四階の建築師は二階の建築師以上にその基礎工事から離れて如何に立派な三階四階を建てるべきかに苦心する、かくて凡ての學術、技藝が時間の経過と共に、實際から遠ざかり、只頭腦さへ、よければ上層建築が出来ると誤り、頭で考へる觀念の體系に置き換へられたのである。之が近代の科學であり宗教である。

宗教や科學のみではない、凡ての思想體系もさうである。だから、父兄も青年も等しく、頭の問題に重きを置き、只考へ方さへよければよい記憶さへよければよいと思つて一目散に學問に走つた。之が明治文化であり大正文化である。

文化とはギリシャ語の「製造」といふ語から轉化したもので、凡て人間の手によつて造られるものを云つてゐる。そして建築も機械も學術も大いに發達した。封建時代のそれよりも確かに文化は發展した。併し是等の機械化、工業化、化學化、學問化は、果して人間生活を満足せしめることが出来たか、それは寧ろ反對である。それは明かに知識の出發點が違ひ、學問の標準が置き換へられてゐたからである。學問の中で最も正確であると云ふ化學を見ても分る、例へば、米の成分や麥の成分、又は卵の成分を分析すると、色々な要素から成立つてゐると化學者は示してゐる。併し之等の元素をどんなに集めても元の、卵にもならなければ、米にも麥にもならないのである。有機化學では何一つとして、試験管の中で造ることが出来ないのである。だから化學だ

つて絶対ではないのである。識者はもつと進歩したら或は出来るかも知れない、と云ふ豫想で、現在の間違つた化學をも其のまま信じてゐる。そして他人にもそれを本當らしく言つてゐる。そこに觀念の誤りがあり、觀念から出發した學問の誤りがある。吾が學術を本當に有難く思ふのは、學術によつて即ち學術をそのまゝ實行して、それが本當に人間生活の幸福を増すときである。化學をそのまま衛生や榮養に採用した爲に、人間の健康を増し不健全を健全に直すことが出来るとき、吾々は化學を絶対に信するのである。若し現代の化學をそのまま採用して、それが人間生活の幸福を増すことが出来ないならば、吾々は醫者や、藥劑師や、化學者の云ふことを信することもし時見合せなければならぬ。

知識の出發も、學問の目的も人間の生活を離れてはないのである。多くの人は、知識や學問を尊び、觀念を非常に大切がるけれども、それよりも、もつと大切なものは、本當(實物)と云ふことである。

實在を離れては、凡てのものは成り立たない、人間生活は尙更である。人間は自然のままに生きる、自然のままに伸びる、これが日本神道の根本であり。吾々の信念である。

自然のままに生きるといふことは、それはおそらく、鳥は空に生き、兎は叢の中に生き、魚は水の中に生きるやうに、人はその所に従つて生き、その志しに従つて生きることである。

凡ての富は田舎にある。とトルストイは云つた。それは凡ての富は土地にある農村にあるといふ意味である。土地を離れて生命がなく、土地を離れて生活なく、土地を離れて發展がない。だから、土地に基礎のある仕事を中心に發展しなければ、凡ての生活は行詰つて來ると云ふ事である。

だから觀念の科學、觀念の宗教は決して永持ちするものではない。永遠に發展するものはただ實業あるのみである。

自然の子として生れた人間は、自然を父とし、マコト（實在）を母とし、空想に走らずに實際に生きることが大切である。

併し實際と云ふことは、單なる物質ではなくて物心一如の働きを云ふのである。世の中の眞理といふものは大自然、即ち實在よりないのである。實在するものは凡て働きを持つてゐる働きのない實在はない、一切が悉く皆な働き（流動）を持つてゐる。天地の流動から日月星辰の運行に到るまで、實在するものは皆な動いてゐる。此の動くものを學者は、運動といひ、生命と云つてゐる。萬物が此の大きな法則によつて動いてゐる即ち働いてゐる。人間は大自然の子であるのだから、此の大自然の法則のままに生きて行かなければならぬ。即ち、肉體も精神も共に働く、（運動）これが根本の眞理である。即ち勤勞を以て人間生活の根本としなければならぬ。勤勞は人間生活の出發であり、發展である。若し吾々が此の眞理に背いて不勞利得のみを考へるとすれば、是れより大きな罪はないのである。物は存在するから求めることが出来る。働

くが故に與へられるのである。與へらるるから、感謝の心となり、報恩の心となるのである。實在、勤勞、感謝、報恩の生活が誠の生活なのである。然し、人間は求めることを知つて感謝の恩を知つてゐない、感謝することを知つても、恩に報ひる心が缺けてゐる。此の心掛けがなかつた爲、世の中を腐敗墮落せしめたのである。勤勞教育といふことは此の心掛け（心）を充分に養ひ、凡ての人を楽しく、凡ての人を幸福に導いて行かうとするのに他ならないのである。

二、幸福な生活

私は、私の爲に幸福を求めてゐる。だから他人の幸福をも私は認めずには居られない。あらゆる人は皆さうである。幸福を求めることを離れて人生を考へることが出来ないからである。

人生といふことを、學者達は非常に間違つて考へてゐる。例へば、人は生きて行く

價值があるのか、ないのか、生命といふものはどんなものなのか、世の中の一掃始まりは何んであつたのか……といふやうに、人間が生きて行くことは全く掛け離れた考へ方をしてゐるやうである。

此處に、水車屋を唯一の生活手段としてゐる男がある、父も水車屋であり、祖父も水車屋であつた、此の男は、祖先の行つたままに水車を利用して巧く粉を挽くことばかり考へ、その各部分は何んな風に扱へばよいかといふことを、残らず知つてゐた。此の男は機械學のことは一向分らない、ただ、それを呑み込んでゐると同じやうに、出来るだけ良く水車の各部分を調整してゐた、それでその水車の廻り方が申分がなかつた。かうして此の男は生活をし、衣食の途を得ることに何んの心配もなかつた、或る日、此の男は、自分の水車の構造を思案し始めた、さうして、機械學の漠然とした概念を二つ三つ聞き挾んだので、彼は、何が何を廻すかといふことを考へ始めた。搗臼から白石、白石からシリンダーに、シリンダーから車輪に、それから水門に、堰に、

川にと進んで行つた、そして、遂にかう云ふ結論を得た。水車は全く、堰と水によるものである。彼は此の發見を非常に喜んだ、そして、今迄何時もしてゐたやうに、粉の品質のことや、石臼の上げ下げのことや、調帯の張り緩みのことやに氣を配ることを、一切止めて、専ら川の研究に没頭した、それで彼の水車は全く調子が狂つてしまつた。

世間の人々は、彼に向つて、そんなことは仕事をする眞當の道でないからと注意した。併し彼はこれと言ひ争ひ、さうして矢張り川に關する推理研究を續けて行つた、彼は甚だ深く且つ長い間此の問題を吟味し、彼の推理研究の間違つてゐることを、彼に證明する人々と猛烈に争ひ、遂に、川そのものが即ち水車だといふことを信するやうになつた。

彼の推理の間違ひを證明するために、彼に示された、凡ての證據に對しては、此の水車屋は次のやうに答へた。どんな水車だつて水がなければ粉を挽くことが出来ない。

それだから水車を理解するには、何うして水を流すかといふことを知る必要がある。水の流の力を知る必要がある。水がどこから來るかといふことを知る必要がある。

一言でいふと、水車を理解するには、川を理解する必要があると。

人生に對する考へ方もこれと同じである。水車屋の目的は如何によく粉を挽くべきかといふことにある。

人生の目的も如何に良く(幸福に)生きるかといふことにある。それなのに似ても似つかない人生觀をたてて、吾々の生活と全く掛け離れた理論に走つてゐることは無駄である。人生の出發も、人生の目的も、結局は、如何に幸福に暮すべきかにある限り、此の目的に副はない推理研究は、どれほど論理的であり、どれほど雄辯であらうとも採るに足らないものである。

吾々が本當に幸福に暮したいならば、理論を考へる前に、理窟を云はなければ生活が出来ないか、實際(實物を利用して)に即して行かなければ生活が出来ないかを、

考へて見ると分る。

社会学や、哲学や、その他の學問を多くやつた人々は、机の上で、多くの本を読み、多くの理論を立てて考へて居れば、それで生活が出来るものである。それが幸福であるやうに考へてゐた。だから、我れも彼れも皆な學校に學び、誰れも彼れも、田舎を捨てて、皆な都會に集つた。併し本當の生活難、本當の不幸は、遂に都會から發生したのである。間違つた考への人々が、間違つた場所に集つて、どうして幸福が得られやう、それは遅かれ早かれ不幸に陥ることは當然である。吾々は今、此の水車屋の男のやうな間違つた考へ方を止めて、正しい考へ方と正しい場所に集まらなければならぬ。

正しい考へ方とは、實際を土臺とすることであり、正しい場所とは、必要（自然）のことである。眞の幸福は、自然に即して生きることである。吾々は幾十萬、幾百萬の子供を思ふとき、それよりも自分の子供を幸福にしようと思ふとき、自然と連絡を

とつて、自然と共に暮させるやうに導いて行かなければならぬ。

自然といふことは、單に自分の故郷といふことではない。天下到る所、人間を招いてゐる土地が澤山ある筈である。

田舎で暮すことは、農業を意味するのではない。農業も、林業も、畜産も、水産も、機業も、鑛業も、工場も、園藝も、廣く云へば、政治も、經濟も、教育も、宗教も、文學も、皆な自然に還らなければならぬ。そして自然から起つた、自然を中心とした、産業、政治、經濟、文藝のみが、本當に楽しいのである。吾々の頭では、自然を中心にして生活の立て直しをすることは容易でないと思はれる。併しそれは間違つてゐる。今迄のやうな考へ方では、即ち資本主義、個人主義、營利主義の考へ方では容易でない、併し、全體主義、幸福主義、共同主義から考へれば、何んでもないことである。現に、日本だけでも、百萬人の失業者と、三十萬人の餓食兒童があると云つてゐる。併し百萬人の大人を救ふことは、結局五百萬人の家族を救ふことである。そして百

萬人の大人を救ふことは、容易である。内地でも、臺灣でも、樺太でも、朝鮮でも、南洋でも、滿洲でも、大きな自然を持つてゐる。かうした自然に人を送つて、自然を開発すれば何んでもないことである。此等の施設をする爲には結局資本であるから、資本家は反對するかも知れない。併し資本家とても幸福に暮すことには反對ではない筈である。眼の前で損をすることは非常に不利益のやうに考へるからである。諺に「善といふことは、眼前一時の暴利を避けて永久確實な利益を得ることであり、惡とは眼前一時の暴利の爲に永久確實の利益を失ふことだ」とあるやうに、凡ての人を富まし、凡ての人の幸福を計ることは、結局大きな幸福、大きな利益を受ける前程である。だから、識者も資本家も協力して、永遠の利益、確實な幸福を求むる爲に、此の際思ひ切つた實行をすれば、生きて行くのに骨の折れる。(不幸な生活)生活は一變して幸福になるのである。

幸福とは生きること、楽しく生きることである。それは、生きる爲に、無理をしなくともよい生活である。そして絶対な幸福とは死に對する生である。

「艱難汝を玉にす」と云ふことがある。生か死の境地に立つたとき始めて本當の苦しみ、本當の喜びを知ることが出来ると思はれる。

生と死、これほど、眞剣な、これほど本當なものはない。此の實際が凡ての知、凡ての心の根源である。だから

書物の中で信念を作つたり、理論の上で信念を養ふことは絶対に不可能である。

凡て體驗のない、考へ方、實際に觸れてゐない實行は後悔する場合が多いのである。青年の考へなければならぬ所、知者や學者の考へなければならぬ所は即ち此の體驗であり、實際である。空理空論は全く生花のやうなものである、それは根がないからである。

人間の生きる本は此の根が第一である。根とは人間にとつての榮養であつて、それは生きる爲に必要な物資である。此の物資がなければ、人間は如何なる精神を持つて

るやうとも、決して生きられるものではない。

かくて、個人に必要な物質を（最少限度に）満たされる時、人間には理想といふ本性が現はれて来る。理想とは、よりよく、又はより高く、より楽しくといふ意味である。人間が自己の欲求を圖り、その欲望が必要な範囲で満たされたとき、それで満足するものではなく、よりよく、より高く、といふ理想に動かされるものである。

此の理想が文化生活の始めである。學者が人間は社會的動物だと云つてゐるのも此處から出發してゐる。親が兒供を愛するのは、絶對だと云つてゐる。併し親が自分の生命を絶對に保つことが出来ないとき、それこそ絶對である。此處に病氣の母がある。乳呑兒がある。母はその病氣を押して能ふ限り乳房を與へる、併し母がそれ以上重態になつて虫の息となつたとき母は自分の乳房を與へる事さへ考へないであらう、此處にも生の絶對性があり、自己の絶對性がある。だから、理想なり社會性は、自己の生活が、生を保つ上に差支ひのないとき、或はその可能のあるとき發展する。自分の生を

保たれないとき、どうして社會愛など、生れる理由がない。彼等は益々社會愛から離れて、自分の爲に必要な要求をするであらう。

人間は生に對する絶對性の上に立つて活動し、その生が保たれるとき理想は伸びてくる。自分の生活が足りても、自分の生活があり餘つても。猶ほ且つ理想の本性（よりよく、より楽しく）が現はれず、自分だけの生活にのみ走るものがあるとするれば、それこそ非社會性の人間であつて、自然に反するばかりでなく、宗教でいへば惡魔である。

人間が本當に楽しく幸福に暮したいならば、自分の事の爲に竭す前に、自分の周囲の人々を本當に楽しく、幸福にすることである……と。

楽しみとか愉快といふことは、自分一人の中にはないからである。自分の周囲、例へば自分の家族、自分の友人、自分の知人、自分のつき合ふ人々が、悉く不愉快であり、不満であつたならば、自分も當然不快であり不幸であるからである。

だから本當に幸福に暮りたいならば、人に悪感（あくかん）を與へたり、人を苦しめたり。人の苦しみや、人の不幸（ふかう）を黙（だま）つて見てゐてはならぬ。自ら進んで、人の苦しみ、人の悲しみを救ひ人の喜びを喜びとしなくてはならぬ。もつと根本的に云へば、かうした苦しい人、悲しい人を造らないやうに努むべきである。

併し人間の性は自己本位ばかりで理想（よりよく、より楽しく）の生活は人間の本性でないやうに心得てゐる人が澤山ある。これは心得違ひも甚だしいものである。よりよくより楽しく生きたい心が本性でなくてなんであらう。

だから、幾百萬、幾千萬の人間が各々その職分を盡す根本は、自分の仕事を通して、人の生を完ふせしめるやうに、人の樂しみを増すやうに、人の幸福を圖る爲にするのが、天地自然の道であり、又自分も幸福に暮す所以である。

だから人間は争つたり、喧嘩をしたり、騒動を起したりすることは絶対に許されないのである。

私の知つてゐる辯護士に江島博といふ人がある。

此の人は非常に立派な人で、人の苦しみに先んじて苦しみ、人の樂しみに遅れて樂しむといふ人格者で、人を造るに、心の貧しき者には心の糧を與へて之を導き、物質の貧しき者には物質を與へて之を救ふといふ、世にも珍らしい人物である。私は此の人を考へるとき、世の中の人々が皆な江島氏のやうに立派な心掛けになつて欲しいと衷心から願ふのである。

かくて理想の本性は發展して、周囲と調和し、社會と調和し、國家と調和し、宇宙と調和して行くのである。

併し金持ちは恚う考へてゐる。貧乏人とおつきあいすることは損だ、さう云ひ乍ら貧乏人とつきあつてゐる。賢者は愚者とつき合ふことは馬鹿ばかしいと云つてゐる。併し、愚者を使つたり相手にして喜んでゐる。大人と小供とは似ても似つかないほど異つてゐる。併し小供は大人を頼り、大人は又小供を可愛がつてゐる。それは、恰度

大自然に天と地があり、人に男女の別があるやうなものである。男女の性格は似ても似つかないほど違つて居り、能力や思想や體格が全く別である。併し男女兩性はそれを欲してゐる。極度に欲してゐる。それは調和を以て最大の理想とするからである。あるものが、ないものと調和し、短かいものが長いものと調和し、悲しい者がほがらかな者と調和することも亦同じである。

兎に角人間にとつて、一番愉快なことは、生きるといふことである。それと反對に人間にとつて、一番悲しい事は死といふ事である。之はどんな人でも、此の世に生を享けた者は、生きる楽しみがあると同時に、又必ず死ぬといふ、悲しい運命を持つてゐるのである。人は生れ、そして皆な死んで行く、これほど嚴肅な、そして偽りのない眞理はない、だから、いざ病氣だ、災難に會つた。死にさうだといふと、無闇にうろたへたり、騒いだりする、それは本當に死を悲しむからである。諺に「人生最悪の場合を豫想せよ」といふ事がある。併しそれは考へ方によつて、即ち心の持ちやうに

よつて諦めて行かうとする宗教的觀念に過ぎない。人間は生きる事だけを考へ、死ぬことは絶對に考へないとしても、いつのまにか皆な死んで行く、「人間はみんな死刑の宣告を受けてゐる死刑囚である」只無期延期であるといつた詩人があるが、事實さうである。

こゝに人生の不安がある。然し死の不安こそ、生の楽しみであり、生の楽しみこそ死の不安である。生と死がハッキリと區別されてゐる所に、生の楽しみと感謝の生活と報恩の生活があり、死の不安があるのである。若しも此の生と死が全く一致して了つたとき、即ち人間が大自然と絶對に調和したときは、最早や、吾々の生命は全く別な形ちになつてゐる時である。

人間は大自然の子として生れたといふこと、これは誰れでも知つてゐる。そして生の最後は大自然に歸るものであるといふことも知つてゐる。だから生れることは楽しく、歸ることは悲しいのである。死を極度の悲しみとし生きることを絶對の幸福とし

てゐるのである。人間は何んと云つた所で生きる、生きて行かれると云ふほど幸福なものはないのである。併し世には、生きるとは何ぞや、幸福とは何ぞや……と云ふやうな事を考へる人がある。併しそれは人間の生きることは何んの関係もない空想である。そうした考へは事實と何んの関係もない、觀念の上の觀念である。事實に即してゐない觀念は空論であるばかりでなく、天地自然の大道に反してゐる。自然のまにまにといふ道に反してゐる。よしんば、それが觀念の上で判つたとしても、吾々の實際生活には何等の實益もないからである。

或人に云はしめると、生きて行くことはつまらない。何か楽しい幸福な生活が他にないのでないかと考へる人がある。併しそれも結局は頭の中で考へる。想像であつて、生きてゐる事實より楽しい、幸福な生活が他にある筈がないのである。

又人はお金を何百萬圓持つたから幸福である。美人を何十人娶つたから幸福である。お米を何萬石積んであるから幸福である。着物を一生着るほど持つてゐるから幸福で

ある。何百坪といふ大きな屋敷に住んでゐるから幸福である。何十萬圓もかけた家に住んでゐるから幸福である。酒を何升飲んだから幸福である。藝者を總上げたから幸福である。何百圓の料理を食べたから幸福である。踊りを毎晩踊つたから幸福である。唄を毎日歌つたから幸福である。毎日温泉にしたつてゐるから幸福である。芝居を毎日観てゐるから幸福である。魚を毎日吊つてゐるから幸福である。散歩を毎日してゐるから幸福である。といふやうなものではない。本當の幸福は、時々變る所にあるものではなく、終始一貫してゐる所にあるのである。勿論小さな幸福は、時々變る所にもありませんが、最大の幸福は死の瞬間まで生きて行かれる、働いて行かれるといふ所にあるのである。

三、國體明徴の實體

五・一五事件以來、日本精神が非常に盛んになつた。近くは二・二六事件によつて更

に非常時を新たにした。併し此等の事件を契機として、根本的に遡つて色々な指導精神が生れてゐる。その最も有力なものが日本精神であり、國體明徴である。

國體明徴とか、教學刷新と云ふ言葉は知らないものがない。併し學者や識者は之をも理論化してゐるやうである。即ち神代の研究、古事記、日本書紀の研究、國史の研究、哲學の研究、宗教の研究等々何れも學問化し觀念化してゐるやうである。これでは何時迄たつても國體は明徴にならず、教學は刷新されないと考へる。凡ての明徴は、それをば理論化し學問化することではなく、その通り實行すれば足りることである。云ふ迄もなく、日本の神道は又別に神ながらの道とも云ふ。神ながらとは漢字で書くと「隨神」とか「惟神」とか書く、「自然おのづから」と等しく、自然のまにまに、神のまにまにと云ふことである。尤も神のまにまにと云つても自己以外に想像の神があつて、その神の命のまにまにと云ふのではない、自然に反しない無理や偏依のないことである。

神道の最後の眞理は諸冊二尊（イザナギノ尊イザナミノ尊）の修理固成、神武天皇の天業恢弘等の言葉にある通り、世界を道德的に救ふ皇護を翼賛するところにある。天皇は此の皇護を實現する中心、修理固成、天業恢弘の統一意志におはすのである。日本の言語で「神」とは「上」の義であつて、「ちはやふる」といふ冠辭が「氏」と「神」との冠辭であるのは即ち「氏の上」が神であつたからであらう、そして吾等の氏族中、その一番最初の長を天照大御神として崇め奉り、その子孫もまた此の大御神の御正統を「天つ日嗣」と崇め奉つたのである。だから日本は大自然を基本とし、一番最初の長、即ち天照大御神を中心として、神ながらの道となり、祖先崇拜となることは事實の然らしむる所であり、又天地に通ずる大道である。「上」に神ながらの大道、即ち凡てのものを愛し凡てのものを生成發展せしむるの誠あれば、下に血族共同の父たる君主に殉ずるの忠義心のあることも亦當然である。そして血族共同の國家の爲に一身を捧げる奉公の精神と一致し盡忠報國といふ信念にな

ること亦當然である。

而も此の精神は觀念上の問題ではなく、萬民が等しく生きる爲には、必ずさうでなければならぬから吾々は之を絶對に信ずるのである。寧ろ憊うした理窟よりも先に日本の「上」の世にはこの通り實行されてゐたのである。即ち「言上げせぬ國」といつて理窟を抜きにして實行をなされた國柄である。

だから今日の國體明徴、教學刷新といふことは、理窟を抜きにして、先づ實行せよ、と云ふのが根幹である。吾々の神「上」が實際に行はれた通り、凡てのものを生かし凡てのものを生成發展せしむるやうに實行すればよいのである。若し此の實行が出来なければ如何に理論や宣傳で國體明徴を叫び、教學刷新を口にするとも、それは何等の効果もないのである。

最早や觀念や學問の上では、あるとあらゆるものが刷新せられ、明徴にされてゐるのである。只残されてゐるものは、實行だけである。若しも觀念に囚はれ學問に流されて、斷乎として實行が出来ないならばそれは、おそらく國體明徴に副はぬものである。

眞當の國體明徴は教育から改めて行かなければならぬことは云ふ迄もない。人を造るの教育こそはその根本である。併し從來の教育では、本當の人物を造ることは困難である。だから現時の教育を根本的に刷新しなければならぬ。併し教育を刷新することとは、學校を鐵筋コンクリートにすることもなければ、大學出の學士を小學校の先生に振り向けることでもない。國史の時間を増して英語を廢止するとか、教材併合や、年限短縮の問題でもない。學校に實業科を置いて、大工や左官の眞似をさせることでもない。

要は先生自らが、神ながらの道を実践し、實行によつて生徒を引き付つ、實踐によつて感化せしむることである。之は容易な業ではない、二十萬に餘る教育者の中、實行によつて人を導き、人を造ることの出来る先生が果して幾人あるか、今日教學刷新

の出来ない理由も實に此處にあると思はれる。

併し教員とは一定の型に嵌つた。肩書や免状を持つてゐる者のみが教育者であると思つてゐるからである。眞の教育者は、肩書や免状のない人に澤山ある。之等を抜擢して教育刷新の實を擧げなければならぬ。

併し人材を抜擢しただけでは効果のあるものではない、制度も同時に改めなければならぬ。制度を改むる根本を何處に置かなければならぬかと云ふと、それは同じく生活に置かなければならないのである。だから生活し乍ら勉強する。働き乍ら勉強する。自給自足の學校に換へなければならぬ。(中等學校以上の學校を) 即ち農業をさせ、商業をさせ、工業を實行せしめ、之によつて生活の道を構せしめ、遊戯の農業、遊戯の商業、工業、水産業、林業、鑛業を絶對に廢して實際の實業を興し之に依つて自活の道を構せしむるやう現存の學校を改めなければならぬ。自活も出來得ない人間(青年)に高等の教育を施してもそれは何等の實益がないばかりでなく、本人をも不安ならし

め又社會をも不安ならしめる。小學教育は兎に角、中等以上の學校に實學を課し自活せしむることは單に經濟上の安定を得せしめ、學校卒業後社會の落伍者たらしめないばかりでなく、眞の人物を造るの根柢である。

云ふ迄もなく、教育は普及し、知識は民衆に擴り、産業の革命變遷は各人の生活を脅かしてゐる。之を如何に解決すべきか。之が政治、經濟、思想の中心問題である。

學術も文藝も是を解決するものでなければ意義がないのである。生活から離れた、天國の消息や、未來の安住も幾多の慰安と解決とを與へるであらう、併し國民の直接求むるものは、かゝる優長な娯樂ではない。又單に利害を超越し人生を茶化した、放言、壯語も亦吾等の欲するところではない。かゝる時に、小年又は青年をして、自活自修の道を構じ、生活の眞諦に觸れしむる教育こそは極めて大切である。

現代は實に思想惡化、經濟不安、産業の沈滯、教育の困難、得業の容易でないことを始めとし、古い宗教道德の力が薄くなり、十九世紀以來新に指導力となつた學術も、

その分野に於ては兎も角、全體としての指導力としては不充分である。何を以て更始一新すべきかに迷ふの時、實學を授けて實際に當らしめ、眞實を根柢として、生活安全を圖り、道理の教育と相俟つて、神ながらの大道を會得せしむるより途がないのである。

従來の教育は全くその根柢を觀念(知識)にのみ走つた爲、口先ばかりの人間をのみ造つて足腰の立たない片輪者を造つたのである。之からの教育は足下から、しつかりした人間を造らなければならぬ、それにはどうすればよいか、問題なのである。單に學校だけを改める、單に先生だけを入れ代へる、これだけでは到底その目的を達するものではない。教育も亦社會生活の現はれであるから、社會と全く掛け離れて、如何に立派な教育を施し、どんなに熱心な指導をした所で骨折損になる位が積の山である。

だから、自分の子供が可愛ならば、子供のない人は、毎年學校から集立つ幾百萬の少年達と楽しい社會を造つて行かうとするならば、社會の凡ての成人は、子供の爲に、或は吾等の後輩の爲に、今迄の考へ方を捨て、新しい考へ方を持たねばならぬ。

第一に教育などは吾々素人には分らないから學校に任かせて置けば良いものであると云ふ考へから直して行かなければならぬ。教育だから分らない、經濟だから分らない。宗教だから分らない、と云ふものではない。皆な分つてゐるのである。只教育の理窟を云ふことだけが分らないだけである。その根本は皆な同じであり、皆な知つてゐるのである。即ち教育の根本は凡ての人が立派に生きて行かれるやうにするのが目的である。だから、生きて行かれないやうな育て方をしたり。立派でない人間を造つてはならないのである。此の位のこととは、どんなに學問のない人でも、老人でも婦女子でも分つてゐる。だから、吾々は、生きられるやうに仕事を授けて行く、邪な人間を造らないやうに導いて行く、是れは父兄としては勿論、社會人としても慙うした考へ方慙うした行ひを示して第二の國民を造るやうにしなければならぬ。父兄として。先輩

として、指導者として、此の位の働きをいやがつてゐるやうでは、若い者は悩み、若い者は悲しんで、遂には思想が悪化し、色々と社會が困るやうな事件が起きて來るのである。

第二は、自分の行ひを改めることである。

何も知らない子供達や、少年は、大人の眞似をせず、先輩の眞似をしないで、只無邪氣に戯れてゐるやうであるが、その實、大人の行ひ、親の行ひを見て、その通り實行するやうになるものである。即ち子供達が親の年頃となり、先輩の年頃になると、酒を飲んだり、女に戯れたり、怠けたり、争つたりするやうになる。これは、子供の時から、家庭に於て、周圍に於て、社會に於て、かうした事實を多く見せつけられた人に多いやうである。

又かうした實際ほど教育的効果のあるものはない、だから吾々は本當に我が子の成長を喜び、眞面目な生き方を樂しむならば、吾れ自らを正しくし、吾れ自らを樂しくして、範を示さなければならぬ。憊うした實際が、人を造つて行く、人を導びいて行く上に極めて大切なことであつて、話しがうまいこと、理窟が上手なことは決して人を造る所以でないのである。

第三は、周圍を美しくして行くことである。家の周圍りばかりではない。家庭、近所、社會といふやうに周圍を樂しくして行くことである。個人的には誰れでも立派な理想を持つてゐるが、いざ社會となると、立派な理想が薄らいで了ふ。それは個人の生活が本當に充實してゐない爲もあらうが、物の見方、考へ方の相違に非常な關係がある。例へば學校とか、病院などは土地の廣い所ならば、どんな所にも建てるけれども、料理屋とか、待合になると、非常によい場所に陣をとつてゐる。上野池の端とか、柳橋とか向島とか云ふ所は天恵的に非常に優雅な氣持の良い所である。酒を飲む場所としては、もつたない所だと思ふ。自然に人を造るに適した場所に、學校とか、病院を置いて、酒を飲んだり、肴を食つたりする所は町の隅の方に片附けるやうにしな

ければならぬ。凡て世の中は反對で、非常に大切な事には比較的無感心で、さう見得を張らなくともよい所に莫大な金を掛けたりしてゐる。例へば毎日住んでゐる家には金を掛けないで。一年に一回若くは二回位しか行かない別荘に不必要な金を掛けたり、自分の家では食ふものさへ惜しい程、けちんぼうなくせに、他所で飲んだり食つたりするときは非常に氣前よく使つたりしてゐる人もある。是等は本當の幸福を知らない、氣儘者で、つまり、正しい見方考へ方の出来ない人である。これではいけない、どうしても正しい見方考へ方をし、よい場所、よい環境を與へて行かなければならぬ。それには思ひ切つて、從來の場所と周圍とを換へ、思ひ切つた改造をして行かなければならぬ。

次には見得を張ることを止めなければならぬ。見得と云ふ事は空想を描くことである。始めから空想なのであるから、そこには何一つないわけである。それなのに、あゝもすればよいだらう、かうもすればよいだらうと頭の中に描くことである。之は佛

教で云へば迷ひの心と云つて非常に悪い働きののである。少し考へて見れば分るやうに、始めから空な所に喜びがある筈がない、空な所に、喜びを掴むことは出来ない。だから、あの學校に上げたらさぞ幸福であらう、あゝした本を読みましたらさぞ幸ひであらう、あゝ云ふ服装をさせたらさぞ喜ぶであらうと、只見得を張つてはならないのである。よくあることであるが、親は餘り財産もなく、又能力もなく、信用もない割合に、身分不相應な考へを起し、自分の子供のいふ通りに育て、あの學校、この學校と教育を授け、漸く子供が成長し、學校も卒業したから安心だと思つてゐると、子供は自分の生活さへ出來ず、親に生活を依頼すると、親も學校卒業迄と思つて無理に無理を重ねて學費を續けたのに、學校を卒業しても未だ、その始末では困るといふので、親子が衝突をし、終ひには子供が親にくつてかゝり、親の育て方が悪いのだ、親の導き方が悪いのだと云つて親不孝をする子供を造つて了ふやうな實例が澤山あるのであ

かやうな譯で、見得に教育したり、空想を描いて學問をさせると、親の不幸ばかりでなく、本人も非常に不幸に陥るのである。

以上の事を考へて、學校を選び、子供を指導するならば、學校教育、社會教育と相俟つて相當な効果を擧げることが出来ると思ふのである。

只實學を教授して、自給自足でやつて行く學校は農學校又は之に類似する學校が二、三校あるのみであることは全く遺憾である。

教學の道、國體明徴の道は、常に理論の問題ではなくて、仕事を授け、仕事を通して道を明かにすることである。此處にも、仕事が先で、考へが後であるといふことが分る。働くのに働く場所がなく、耕すのに耕す土地のないとき、人間はどうして生きて行かれるであらう、生産がなくして、どうして消費があり得るだらう、此處に國體明徴の眞髓があるのである。

四、日本思想の實相

日本人の固有の思想として第一に數へらるゝものは、何んと云つても祖先崇敬の思想である。日本人はその居處が非常に狭いのと、孤立の島國であるといふ事から自然、家族的となり、祖先が同一であつて單一であるといふ處から、祖先崇敬の思想が自然に強められたものと思はれる。此の思想は我國の上古より今日に至るまで一貫してゐる信念であつて、苟くも日本民族の血を受けてをる者は、いつの世に生れてをらうが、又どこの隅に住んでゐやうが悉く皆な同様である。不思議なほど神秘的な特質を持つてゐる國民である。

神代史を觀れば直ぐ様分るやうに、吾々の祖先が、如何に民を愛し子を愛したか、又如何に土地を基ゑとして政をとられたかを仰ぎ慕しんだ事蹟によつても容易に察せられる。即ち最古最上の祖先を尊敬して「カミ」と稱し、そして又、「カミ」はあらゆ

る美德を備へられてをり、特に仁慈にましまして、その身體、その生命、その心、その職業、この土地、食物を附與せられた本源として、一つは其の功徳を慕ひ、一つはその恩恵に感謝するの真心に出發してゐるのである。

そして三種の神器と傳國の神勅とを以て、皇尊と國家と一體にして、子子孫孫連綿繼承、彌增彌榮て、天壤と共に窮りなく維持存續すべきものぞといふ。祖先崇敬の思想の至極を表示せられてある。

此の鏡は、専ら我が御魂と爲して、吾が前にいつくが如くにいつきまつれよ。「古事記」の神勅は、その對象を明示したまひたるものである。

葦原千五百秋の瑞穂の國は、これ吾が子孫の王たるべきの地なり。宜しく爾皇孫仰いて治せよ。さきくあれ。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮まりなかるべきものなり。「日本書記」の神勅は、その理想目的を訓たまうたものであつて、臣子たる者の本分として、永久に一人残らず守らなければならぬ大御心であつて、これは明か

に祖先崇拜の思想の根源と、極致である。かくの如き日本國體の尊嚴、吾が皇室の神聖、吾が民族の秀妙なことは、世界を通じて斷固動かすことが出来ないものである。

神武天皇は率先して此の思想を以て御心を固めさせられ。東征の事を始め、逆徒を鎮め、良民の安寧を圖り、國都選定の事など、大小のこらず、すべて祖靈に聽き、神意を體してそして後決行せられたのである。全く至誠を籠め、至敬を致されてをる有様は、吾等國民の感激して止まないものである。

又、御即位の第四年には、わが皇祖の靈、天より鑒りて、朕が躬を光らし助けたまへり。今もろくの虜己に平らぎて、海内事なし。以て天神を祭祀りて大孝を申ふべきなり。「日本書記」

と詔りせられて、大和國鳥見山の中に祭壇を設けて、御自ら祭器を造り、齋戒して、敬虔莊重に。祖神を祭祀し、以て大孝の徳、即ち祖先崇敬の至情を表現し實行したまうたのである。是れは、實に萬世の規範であつて、建國の精神を明かに示されたと共に

に、治政の根本、道德の基礎を表現したまひたるものと拜察される。吾等國民は常に此の思想を中心とし、根本として、實踐窮行すべき此の上もない大切な事柄である。

また、祖先崇敬の實相を考へて見ると、その根本の精神は、全く祖先の功業恩徳を感謝し乍ら、自身も其の遺志遺業を承けついで、益々之を宣揚發揮せんと念願するところ存するのである。之は子孫として自然の情であり、當然の務めである。此の精神と此の實踐とがあつて、國民は繁榮し、國家社會は隆盛となり、文化生活は向上するのである。殊に我が國にあつては、皇室を根元とし、中心として成り立つたものであり、それが家族的に父子同様上下全く親密に組み立てられてをるのであるから、愈々強く、また深く、固くなるによつて、皇室は益々尊嚴となり、永久に國民崇敬の中心とならせられ、同時に、國家はいつまでも、正しく美しく發展して行くのである。だから吾等國民は、小にしては各自の氏祖を崇敬、祭祀し、心深く、そして堅く、祖先の志しを繼ぎ、益々此の精神を發揮し、大にしては、皇祖神明を尊敬して、常に

皇室を景仰尊愛し奉り、念頭必ず諸天皇の御精神御徳業を追懐し奉つて、國民生活の安定、國家興隆の祈願をすべきである。

國民生活の發展、日本帝國の隆盛は、一に繋つて、此の祖先崇敬の思想の堅固と、徹底した存續とに在ることは云ふ迄もないのである。只だ吾等はその祭祀禮拜を知つてその精神を忘れ、或は、祖先崇敬の理論を知つて、自ら修養の業を怠り、自ら崇敬を受けることを知つて、徳業を爲すことを忘れるならば、之れより大きな罪はないのである。吳々も實踐の道を窮行し子孫から尊敬され、追慕されるやうな、徳のある行ひを爲さねばならぬ。

五、天地に通ずる生活

善と惡の判断、是は誰でも知つてゐる。どんなに學問のない人でも、どんなに山中の人でも皆な知つてゐる。自分のした事が善であつたか、惡であつたか、人情にそ

むいてゐたか、不正であつたかといふことは、人は皆な知つてゐる。併し善とはどういふことであるか、悪とはどんなものであるかといふと、それは皆な知つてゐるとはいはれない。

何事でも、その本質に適つたものを善といひ、其の本質に外れた事を悪といふのである。品物はその品物の本質に適つてゐるならば良い品物であるが、それがその本質に適はぬときは悪しき品物である。例へば、コップは水を飲む爲に造られたとすれば、便利に水が飲める時は良いコップであり、水を飲むのに不便であれば悪いコップである。人間の行ひでもさうである。或る人の行ひが、人の本質に適つて居れば、その人は良い人であり、人の本質に外れて居れば、その人は悪い人である。日本語には通常「よし・あし」といふ言葉が唯一つある。そして人間にも、人間以外の動物にも同じく「よし・あし」といふ言葉を使つてゐる。外國の言葉では、動物物の「よし・あし」といふ場合と、人間の品行に使ふ「よし・あし」といふ言葉は異つてゐる。例へば、支

那の文字に、善といふ字と、良といふ字がある。善馬といはずに良馬といつてゐる。日本語では、よき川、よき山、よき人といふて、區別がない。又、正と云ふことは、法則に適つてゐると言ふ意味で、或る法則があつてそれに當嵌つて居れば、正といひ、其の法則に適はぬものを邪と云ふのである。邪とは曲つてゐるといふことで逆とか反對とかいふ意味である。善悪といふ方は、本質から來た言葉であり、正邪といふ方は、物の動きから來た言葉である。

善人といふことは、やがて正しい行ひをする人であり、正義の人といふことは人間の本質に適ふといふことである。一方は靜的であり、一方は動的である。前者は本質であり、後者は實行である。

日本古來の思想を良く現してゐる言葉であつて、宇宙の善は何んであるかといふと、それは大自然である。之を人間に喩へれば、人間の本性である。言ひ換へれば、人間の本性に適ふものは善であり、大自然に適ふものは最高善である。中庸の始めに、天

命之謂性率性之謂道とある。之れはよく人間の本質の成りたち、行ひの成り行きを現してゐるのである。然らば大自然のまゝに、或は人間の本性のまゝに活きよ、といふことはどういふことであるかといふと、自然のまゝ、本性のまゝとは、作りごとをせずといふことである。言ひ換へれば、偽らずに正直に、ありのまゝにといふことである。人間の本性に反するやうなことを、自分の知識で考へ直して、あゝも云つたら良いだらう、慙うもやつたら良いだらうと、曲らないことである。ありのまゝ、作りごとをせずといつても、何も考へるなといふ意味ではない。人間の本性に適つたことならば考へられるだけ考へ、實行の出来るだけ實行した方がよい。併し人間は自分にのみ都合のよい事を考へて、多くの人の本性に適はないやうな事を、考へつたり、行つたりするのが多いのである。是れでは善の生活ではなく、悪の生活になつて了ふ。これは深く戒めなければならぬ。人は大自然のまゝに活き、人間の本性に適つたやうに働いて行くと、人之を、稱して天地に通ずる大道といふのである。

大自然のことを天といひ、人間の本性を地とし、天に適ふことは地に適ひ、地に適ふことは又天に通ずるといふ意である。

人間の本性を更に詳しく述べれば、天から與へられた、(自然から生れた)生命は、自然のまゝの本性を持つてゐる。これを誠心とも云ふ。どういふ本性であるかといふと、それは勤勞の本性、食を求める本性、人を愛する本性、よりよく活きる本性、(平和な本性、美を欲する本性、共同の本性)などが重なるものである。

かうした本性は、人間の知識や、學問や、考へ方で出来るものではない。如何に求めやうとも、如何に造らうとしても、どんなに變更しやうとしても、又かうした本性を片端から追拂ふとしても、どうしても追拂ふことも出来ないもの、押へ切れないもの再び芽生えて来るもの、之が本性なのである。之と反對に、人間の意志や、感情や、習慣や、知識でなくすることのできるものは、決して本性ではない。人間は、社會生活が複雑し、知識が進んだ爲に、人間の知識や感情をそのまゝ、本性だ

と思つて誤つてゐる場合が澤山あるのである。若しもかうした誤られた、感情や知識を持つてゐる人があるとすれば、一切の感情一切の知識を離れて、人間の本性に戻つて考へ直さなければならぬ。誠心となつて考へ直さねばならぬ。その時最後に觸れるものは。人間を本當に活かさねばならぬといふ事に到着する。これが誠心であり、本性である。知識を父の如く尊敬する人は、此の世の中を造つて呉れたものは何んだか。人間は生きて行くことが本當に幸福か不幸か、女が先か男が先だつたのか、死んだ先はどうなるのか、などを考へて惱んでゐるけれども、それは人間が活きること、楽しく活きること、は全く掛け離れた空想である。こんなことを考へる人は、何んの仕事もない怠け者か、世の中を茶化して渡る講談師のやうなものである。本當に人間の本質を辨へ、大自然の動きを知つてゐる人は、同じ人間に生れ乍ら、その日の生活に困つてゐるといふことは、どう云ふ譯か、そしてそんな人が何人あるのか、その人々は今、現に何をしてゐるのか、生活に困らない人でも、その人達は人間の本性に適つて

働いてゐるのか、それとも邪まな生活をして居るのか、善の生活か、悪の生活か、之等のことを本當に調べて、之等の人々を救ひ、之等の人々を導く爲に一身を捧げてゐるに違ひない。

本當に心の正しい人は、人を偽つたり、人を苦しめたり、人を泣かしたりすることを止めて、人の喜びを増してやつたり、人の生活を助けたりしてゐる。

本當の善人は、誠の愛を以て人に接し、虚偽はりなく働いてゐる。

本當に正しい人は、社會共同の爲に文化を建設し、産業を興し福利を共にしてゐる。

本當に徳の高い人は、人の生活を無視して自分の幸福はないことを本當に知つてゐる。だから、人も活かし、吾も活き、人も伸ばし、吾も伸びやうとするのである。國家も、銀行も、會社も、工場も、個人も、皆なかうした本性に適つた仕事をして行かなければならぬ。

即ち生命を維持する爲に、愛を擴める爲に、向上の生活を進める爲に、力を致さなければならぬ。一人としてその所を得ず、その志しを得ない爲に、生活に困るやうな人を造つてはならない。一人として、邪まな愛に踏み迷ふもの、ないやうに、一人として、争ふ者のないやうに、一人として進歩のない生活のないやうに、仕事の性質、社會施設の實相を再び考へ直して、人間の本性に適つた仕事、人間の本性に適つた社會施設にして行かなければならぬ。我が日本に未だ之等に關する研究所もなければ、直接之を指導するの機關のない事は甚だ遺憾である。併し本當に自覺された人間は、一々之上司に仰ぐことを止めて、自分の心を通し自分の仕事を通し自分の家庭を通し自分の住んでゐる社會を通して、人間の本性に適ふやうに組み代へて行かなければならぬ。

六、女性の本道

男と女がどちらが先に生れたかと云ふことは落語に等しい。それは何れも同時でなければ成り立たないからである。恰度、天と地がどちらが先であるかといふのと同じである。

男女兩性は實に眞愛から出發してゐるのである。此の愛がなかつたならば男女は永遠に結ばれないのである。永遠に結ばなければ社會は永遠に續くことを止めるであらう。その時男女の兩性も亡びて了ふ。だから愛は男女を繋ぎ、社會を繋ぎ、宇宙を繋ぐ鎖である。此の鎖が切れたり。他の者と結び附くとき、その家庭は亡びその一家は滅亡するのである。かく大切な愛を性欲によつて、感情によつて誠のない愛を貪る人があります。憍う云ふ人は將來、必ず不幸に陥るのである。

そして男女の地位は、どちらが尊く、どちらが軽いといふものではない。男女共に各々その本分を守るとき、その地位は同じである。だから、男尊女卑といふことは成立たないのである。近頃婦人の中にも、男女同權を叫ぶ人があるやうであるが、それ

は形式上のことで、形式を以て眞當の價値と考へてゐるからである。形式と價値と云ふことは、全く違つたもので。例へば十六七の青年に、今日からおまへに裁判官の肩書を與へる。或る放火犯を裁いて見よ、と命じたとする、その青年は果してその放火犯人を正しく裁くことが出来るであらうか。

茲に一人の曲者がある。此の曲者を善人に導いて見よ。そのかはり、おまへに大學教授の肩書を與へる、と約束する。併し實力のない者がどうして此の曲者を善人に向けることができやうか。

本當に自分の價値を知つてゐる人は、その形式や肩書や黄金によつて自分の節を曲げることをしないのである。昔ギリシヤにクラエラーといふ人があつた。或時皇帝に召されて、今日から總理大臣となつてギリシヤの國を治めて呉れないかと依頼された。するとクラエラーは即座に私はその適任でないことを申上げて總理大臣の椅子を斷つた。……と云ふ話がある。クラエラーは流石に自分の本性、自分の價値を知つてゐた。

のである。今日の人は、大臣になりたい爲に病氣になるさうである。即ち大臣病と云つて、大臣にさいなればよい、大藏大臣でも、農林大臣でも、轉して商工大臣でも、文都大臣でもその仕事の性質はどうでもよい、大臣の肩書が欲しいのである。男も女も同じであるが、名譽病にかゝつてゐる人が澤山ある。自分の本性、自分の天稟を忘れて、只男女同權を叫ぶ者があるならば、之より甚だしい誤りはないのである。諺に、「男子は國を守り、女子は家を守る」とか、又、「男性は法律を作り、女性は道徳を作る」とあるやうに、男性と女性の本分は全く違つてゐるのである。若し此の世に天國があるならば、それはおそらく家庭であると思はれる。そして家庭は絶對平和の樂園でなければならぬ。故に女子は常に愛に満ち喜びに満ち、樂しさに満たねばならぬ。此の喜びある家庭には、如何なる男性も、遂に溶かされるものである。どんなことがあつても、がみく云ふ女性であつてはならぬ。次に女性は誠と一條でなければならぬ。即ち純情、貞操でなければならぬ。誠であれば、虚を偽りの生活がない。何時

如何なるときでも公明正大である。此の公明正大が、やがて喜びとなり貞操となるのである。

時間的にも、場所的にも少しの偽りも曲りもない、之れが家庭の道徳を作り、社會の道徳を作つて行く根本である。純情であれば、夫を愛し、我が子を愛し、愛すればこそ、夫や子供の爲に勤勉となるのである。可愛いものの前に怠惰はない、愛するものに對し虚偽がない、そして此の純愛は、凡ての物に及ぼし、一點一物も愛を以て取扱ふやうになる。茶碗一個、米一粒でも愛すればこそ大切にされる。大切にすれば永持ちし、經濟が取れて来る。家財道具の凡てを本當に愛して見よ。朝から晩までかゝりきつても、猶ほ時間が足りない筈である。算筒の中の一つ一つから、茶碗の一つ一つ、疊の目の一つ一つまで愛すること、それは非常に大事なそして偉大な仕事なのである。

男性は働きの力、集むるの力に對して、女性は、産むの力、育てるの力を持つてゐる。育てるといふことは、只ゴム風船のやうに大きくするといふことではない。中が空ではない、中味も外側も充實して大きくすることである。これは非常に大切なことである。一人の子供に對し、二人の親がかゝりきつても、完全に育てることが出来る人が多し、況んや母性が一人の力で育て上げるといふことは並大抵でないのである。まして三人五人の子供を育て上げるといふことは實に偉大な使命である。育児の道は、教育學を學んだ育児法を勉強した。新聞雑誌を見た位で子供を育てることは出来るものでない。誠心それ自己、實行それ自體が育児の根本であるから、女性の修養、女性の心掛けほど大切なものはないのである。

かくて衣、食、住の整理、經濟、衛生、教育の各部を總轄して司り之に對し遺憾のないやうにするのであるから、女性の實生活に及ぼす影響は大きいのである。更に女性は結婚によつて夫人と調和しなければならぬ。調和といふことは、單に長短補足と云ふことではなく、夫と一緒になる。夫の心、夫の體になりきるといふこと

である。夫の成功と共に成功し、夫の向上と共に向上し、夫の失敗と共に失敗し、いつでも夫の心と一體になる。これが女性として極めて大切である。衣、食、住から、趣味嗜好に至るまで、夫と共にする。夫になりきる、之が家庭生活の根本である。だから婦人として爲すべき使命は、男性のそれに比べて非常に複雑であり多様である。かく重大な任務を忘れて社會への進出を喜び、或は男女同權などを叫ぶ者があるとすれば、家庭を破壊し、第二國民の養成を誤り、遂に社會國家をも亡すに至るものである。天は男子及女子を區別して呉れた、女性には、男性の代ることの出来ない特殊な性能と體とを與へて呉れた、是れが天職でなくてなんであらう。この妻であり、母であるといふ仕事こそ婦人の第一の職業である。

此の第一義の職業ほど、貴く又楽しいものはない、即ち一家の主宰者となつて、自分の家庭をば、全家族の安息所とし、避難所とし、樂園とし、金殿玉樓の間をさまよふよりも、賤ヶ伏屋でも我が家に勝る所なからしむるものは之れ皆母性の力である。

額に汗を流し、手に豆を出さしむる夫を感謝せしめ、無邪氣な兒供達は、親を神の如く信せしめ、又最初の家庭學校を自ら作つて教師となり、いとしい吾兒の、高潔な人格や、圓滿な品性を養つて社會國家に奉仕するの姿こそ、如何に貴く且つ如何に楽しい事であらう。

隠れたる偉人とは、蓋し婦人を云ふのである。

七、須らく第一人者たれ

「吾れ天命を知る。」といふ言葉がある。自分を良く知るものは、自分である。孔子も、己れを知る者は大なる成功者なり……と云ふてゐる。天は必要によつて作り必要によつて生命を與へたのである。然らばその必要とは何んであるかといふと、それは天から與へられた特長である。何人も真似の出来ない特異性である。此の特長こそ吾等の天職である。然るに人間は、その知能をのみ頼み、その財産に力を得て、我れこ

そは、何んでも出来るると自惚れ、之れといふ特長に向つて進まない人がある。實業にも野心を持ち、政治にも野心を持ち、名譽にも野心を持ち、次から次と職業を換へ何をやつてもやり得るが、何をやつても失敗する人がある。之れは明かに己れを知らない人、即ち天命を知らない人である。

茲に永井柳太郎と常陸山といふ實話がある。永井先生が未だ青年時代、或る日、關西に旅行をした、計らずも常陸山と一緒になつた。兼て知人の間柄であるから、車中で色々な話に花が咲いた。その時、常陸山が、永井先生に向つて、「永井君」君は横綱になる秘訣を知つてゐるかと思はれた。流石の永井先生も、その時ばかりは返事が出来なかつた。すると常陸山は、口を開いて、角力には四十八手、裏表あるといふが、四十八手を研究し、あの力士には、此の手で投げられたから、此の手も研究して置かう、あの力士にはあの手で投げられたから、あの手も研究しなければならぬと云つて、四十八手を皆な覚えやうとしてゐたのでは、遂に、禪擔ぎで終つて了ふ。人は各

々得手、得意といふものがある。その天から與へられた、得意一手を伸ばして行けば遂には横綱になることが出来る。それを、あの手、此の手と迷ふから、結局、横綱になることが出来ないのである。と云はれて、永井先生も非常に感服し、それから以後、自分は、政治家になるべきか、教育家になるべきか、宗教家になるべきかについて、非常に苦心し、その天性を發見して、遂に政治家たらむことを志し、今日あるを得たといふ事である。是は永井先生にして始めて可能なことであるが實に味ふべき金言である。永井先生は人も知る通り、齋藤内閣に拓務大臣として令名あり、其の後も入閣を懇望された事は屢々であるが、天職に副はない椅子は噓ひ大臣の椅子と雖も決して受けないといふのであるから、實に偉大なる人物といふべきである。

かくの如く人は各々その天賦を持つてゐる。かゝる天賦の才能は、學んだり、眞似たりして得られるものではない。自らを發見して勤勞を惜まないとき、始めて第一人者たるの地位を贏ち得られるのである。即ち自己發見、自分の得意に向つて一目散に

進めば到る所に第一人者たるの地位が得られるのである。農夫としての第一人者、商人としての第一人者、學者としての第一人者、軍人としての第一人者、政治家としての第一人者、宗教家としての第一人者、藝術家としての第一人者、工業人としての第一人者、職人としての第一人者、漁夫としての第一人者、労働者としての第一人者、たることが出来るのである。

進めば其の所に第一人格たるの地位が与らねるのである。農夫としての第一人格、商
 人としての第一人格、学者としての第一人格、實業家としての第一人格、政治家としての
 第一人格、宗教家としての第一人格、藝術家としての第一人格、学生としての第一人格、
 一人、既人としての第一人格、漁夫としての第一人格、學者としての第一人格、
 たることが出来るのである。

……終り……

大谷良意著

四六判上製函入
定價壹圓送八錢

人生讀本

哲學も宗教も、物質も凡てに行詰つて來た今日、新しい打開策は何んであるか、知識でなく學問でなく觀念でなく、實力であり、實行である。此の指導原理を提唱して、心の貧しい者には心を救ひ、物質の貧しい者には物質を救ふ指導書は實に本書あるのみである。
 本書は從來の型を破つて誰にも読み易く解り易いやうに説いたもの、何人も本書によつて人生の幸福を求められよ。

發賣元

旭

書房

東京市麹町區上二番町二
坂野東京三五二六九番

昭和十一年四月十五日印刷
昭和十一年四月十日發行

著作権所有 正價二十錢
附 録の生括奥附

著作者 大谷良意

發行者 川崎久敏

東京市麹町區上二番町二

印刷者 西川喜右衛門

東京市神田區小川町二ノ十二

印刷所 株式會社 秀工社

東京市神田區小川町二ノ十二

發行所 日本勤勞教育協會

東京市神田區上二番町二
坂野東京三五二六九番

發賣所 旭書房

東京市麹町區上二番町二
坂野東京三五二六九番

終

